

---

# Hunter's Life

らいと

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

H u n t e r ' s   L i f e

### 【Nコード】

N 5 7 7 9 G

### 【作者名】

らいと

### 【あらすじ】

ハンターで栄える東の大都市、ジャンボ村。そこからさらに東北東に進むとあるリトル村の子供、カイト。カイトは兄のエイトの狩りについていき、フラヒヤ山、通称雪山を訪れる。そこでカイトは自我を持つ、銃と剣をあわせたような不思議な武器に出会った。小説初挑戦です。。更新も遅いですが、読んでくれると嬉しいです。

## プロローグ

他の地と引き離された極寒の世界

狩人には雪山と呼ばれているその山の山頂へと続く雪原の端に、一流のハンターでも知らない者が多い小道があった。

そこは小さな空洞になっている。だが、その空洞の本山へと戻る道は積もった雪で閉ざされていた。

吹き抜ける風が鎧の隙間を突き刺すかのように吹き付ける。だが、彼にはその程度のことは何も感じないに等しかった。

彼が今、血がにじむほど唇を噛み締めるのは、マフモフと呼ばれる雪国ではよく使われる防具、

いや、厚手のコートと言ったほうがいいかも知れない。

その、ボロボロのマフモフまとい、フードを深くかぶった一人の女とその腕の中で眠り続ける赤子。

そして母の袖を掴んでフードも被らずうつむき続ける幼子。  
さらにもう一人、いや、もう一匹。

こちらマフモフを身にまとっているんだが妙な小ささで、  
母に抱かれている赤子よりもさらに小さい。

アイルーと呼ばれている、人間に一番近い獣人族と呼ばれている種族の一つ。

その存在の危機が彼を苦しめていたからかもしれない。

この種族は元々、人間と対立していたが、その中には人間の言葉を覚え、友好関係を持つとするものも

少なくはない。このアイルー、シフォンもその一種だった。

その時、彼は口を開いた。

「…シフォン…。俺の調合分、合わせて三つの戻り玉で山のふもとキャンプに戻れ」

フードを被ったまま母は驚いたように彼を見る。

一瞬だけの静寂、それを打ち破るかのようにシフォンが大声で反論する。

「ニヤニヤニヤ！？ 何を言うニヤ！ お前一人でアイツを止めるなんて…。僕も一緒に」

「早く行け！！」

いきなりの怒鳴り声にシフォンの言葉が詰まる。

その直後に彼は2人と1匹の目の前に戻り玉を叩きつけた。

「あなた!!!」

それが最後に聞いた彼女の言葉だったのかもしれない。

彼は左手を真横に上げると、小さく親指をつきたてた。

空洞の埋まっていない方の出口から、真っ白な日の光が差し込み、  
風が冷気を巻き上げ吹き込む。

そして、全ての方向から聞こえるような圧倒的な存在感の咆哮。

母は緑色の煙の中から彼は一本の刀を手に出口へと走っていく姿を  
祈るように見つめていた。

## 1話 『潮風を受けて』

今までの長い暗黒の世界が突然の光にかき消される。  
吹き付ける風の潮の独特の香りが心地いい。

カイトは船に詰まれた荷物の袋の一つの中にいた。漆黒と言う表現が相応しい長めの黒髪。  
その色に比例した瞳。

ボロ布のような半そでに薄い茶色の掛かった半ズボンをだらしなく  
着ている。

その姿をエイトは冷ややかに見下ろしていた。

「……え〜と、お前……糞弟、今度こそはシバこうか」

こっちはカイトとは対照的に綺麗な茶髪、ブラウンの目をしていた。

「……まあ、まあ。リトル村じゃあ雪なんて見られないんだからさ。  
13歳の誕生日ということだ」

カイトの言葉の後ろには『w』が付きそうな表情だった。エイトは不機嫌そうに苦笑する。

カイトとエイトは5歳違いの兄弟だった。

カイトは雪山へ狩りに向かっているエイトの船に忍び込んだのである。

「雪、見に来たって……今日の相手は飛竜だぞ？　クックとはわけが違うんだぞ？」

エイトの軽い表情が曇る。飛竜はこの世界の生態系の頂点に座す種のものである。

これからエイトが狩る予定だったフルフルもその一種だった。

飛竜の中でも下級とは言え、その存在は鳥竜種の大形モンスターイャンクックを遥かに凌駕するものだったのである。

だが、カイトの表情は全く変わらない。

「クック自体、敵に値しないから紙が牛乳になったぐらいでしょ」

「あのなあ……。何そのたとえ？ 意味わかんねえよ。しかもいつも戦ってるの俺だからね？」

エイトの溜め息が漏れる。そんなことにはかまわず目を輝かせて船を飛び回るカイト。

船の手すりの上にがんばって出した顔に吹き付ける波風がその黒髪をたなびかせた。

その様子をエイトは少し口元を緩めながら見つめていた。

\*

それはエイトが食事の準備をしている時だった。

突然、船の先端のデッキの方から悲鳴にも近いような声上がる。

何かあったのかとエイトは近くにあった愛刀を拾い上げそれを片手にデッキへと走っていった。

だが、そこにあったのはあまりにもあっけない弟の驚きの声。

そして彼方に見える陸地のそのまた遙か彼方にある

白銀の山の壮大な景色がエイトを待ち受けていた。

「うおー、すげー……。あそこのてっぺんらへんまで行くのか？」

カイトの大きな瞳が山の麓から、頂上へと動いていく。小さな口は半開きになったままだ。

カイトが身を乗りだした瞬間、カイトの頭を誰かがポンと叩いた。  
「ハイ、お前は頂上付近の雪原までは連れて行かないからな。」

麓のポツケ村か密林に行ったときみたいにキャンプかその周囲待ち  
だな」

その言葉を聞いたとたん、カイトは何度もジャンプし、地団太を踏  
む。

「え〜、雪で遊びたいよ〜」

その言葉にエイトは苦笑しながら一言。

「…………ダ〜メっ！！ 麓にも雪は嫌になるほどあるぞ」  
笑いながらもう一度、カイトの頭をポンと優しく叩く。

それに対するカイトの「ぶー」と、13歳にはまるで見えない反応は  
船に乗っていたハンターを笑わせていた。

## 2話『風の民と雪に囲まれた村』

周りをチラホヤと白く染めていた雪は、トンネルを潜り抜けると薄っすら一面に広がっていた。木でできた簡単な作りのゲートを潜る。

家は見えるだけでは10軒程度だろう。

その中で赤い光を放つ、ひと期は目立つ見覚えのある小さな家は昔いったことのあるジャンボ村の加工屋に似ていた。

カイトの興味は、トンネルを潜る前の雪から、その村の服装、建物の作りへと変わっている。

さすがに寒いのか、カイトは縮こまり、ブルブルと震えている。その手にはさつきまでのポチャポチャというホットドリンクが入っている水筒からはかけ離れた軽い水筒があった。

「ハア……」

その姿を見て、エイトの口からはため息しか出なかった。

\*

「何じゃこりゃーっ！！ めっちゃ温かいぞおお！！ 兄ちゃんありがとなー！！」

新品のマフrofを着て驚き、飛び跳ねるカイト。

「お前…フードはいいのか？」

エイトが右手に持ったフードをひらひらと左右に動かす。それに向かって頷くカイト。

「うん、いらねーや。邪魔になりそうだもん」

それは、遊び半分ではなく、真面目な考えから出た言葉だと、その顔を見てエイトは思った。

「まあいいや。俺たちはそろそろ行くけど、キャンプらへんまでついてくるか？」

エイトは店に立てかけてあった飛竜刀【紅葉】を方に掛けると、カイトへと視線を向ける。

カイトは目を輝かせて頷いた。  
気がつくど、エイトの脇にはすでに船の上でいっしょにいたハンター3人が揃っていた。  
ハンマー、大剣、弓。カイトには始めてみる武器は、カイトのハンターへの憧れを一層高めた。

雪山へと上る道の脇の岩の上に、一人の小さな老婆が座っているのが見えた。

「どうも、行ってきます。おばば……」  
おばばと呼ばれた人に向かってエイトが軽く頭を下げる。それに続きまわりのハンターも。  
カイトも頭を下げながらそれを目視する。

「悪いねえ、飛竜相手なんて……」  
おばばの言葉はカイトの耳には届いていなかったかもしれない。  
おばばの座っている小さな岩に彫られた奇妙なマークが目についたからだ。  
それにはカイトを含め、エイトやその他のハンターにも見覚えのあるものだった。

\*

リトル村……。シュレイド地方の東にある、  
ジャンボ村をさらに西北西に進んだ、険しい山の中腹にその村はあ  
った。

山といってもポツケ村のある雪山、正式名称フラヒヤ山とは違い、  
冬でも雪などはなぜか降らず、ほぼ一年中霧に覆われている岩肌の  
露出した

殺風景な山というのがこの、北エルデ山の第一印象である。

だが、それは遠くから見た単なる印象であって、その山にいざ入っ  
てみると、

生物の温もりや、リトル村の人々の賑やかな笑い声が  
二股に分かれた吹き抜けの谷から木霊していた。

北エルデ山は恐らく、大陸の中ではフラヒヤ山の次ぐらいであろう  
高さの標高だった。

その山は二股、それと小さな山が突き出た形になっていて、  
小さな山と山の間だけでも100mの深さはある谷が数多くあつた  
のである。

中でもリトル村は本山のたまたまできた平地に造られていて、  
その村の周囲は、巨大な谷と岩壁と人工的に作られた道しかなかった。

そして巨大な谷の間を強烈な突風が吹くことから、飛竜の進入もめつたに無かつたのである。

だが、その環境の中でも巨大な侵入者はあつた。

それはリトル村の人など目も暮れず、50年に一度ぐらいの周期で村のすぐ脇の谷を通る。

そのときは一際強い突風が吹くことから、そしてそれが飛竜の進入を防いでくれていると、

リトル村の人々は『風翔龍』と崇め、祭つたのである。

そしてリトル村に風翔龍を祭つた『風の大岩』と呼ばれる岩があるのだが、

その岩に描かれたマークとまったく同じものがこのポケット村で巡り合つたのである。

「……………あの、おばば……………さん？」

カイトが少々戸惑いながらたずねる。

「おばばでよいよ」

おばばは戸惑うカイトへそっと微笑みかける。

それを見て少し緊張がほぐれたのか、さっきよりちょっぴり表情が  
緩みながら口を開いた。

「……じゃあ、おばば……。もしかして……。もしかしてだよ？  
風翔龍って知ってる？」

おばばの目が一瞬だけカツと見開かれる。

「おぬし……。まさか……。」

### 3話『頂をめざして』

「おぬしら……、リトル村の出身か？」

自分の故郷から北西に何10キロと進んだ村で、いきなり自分の出身地が出たわけだから、

話していたカイトはもちろん、エイトとそのパーティーも目を丸くしていた。

「おばば……なんで……」

おばばは「ホホホ」と愉快に笑う。

まるでイタズラが成功した、子供を連想させる、無邪気な笑みだった。

「簡単なことじゃよ。このポツケ村では、この壁画のモンスターを鋼龍と呼ぶ。

じゃが、遠く離れたリトル村ではこのモンスターを風翔龍と呼んでいると聞いたのじゃよ」

カイトは珍しく、人の話を静かに聴く。これはエイトの考えていた

ことだった。

元々、このような話は嫌いだったカイトが、まともに話を聴くのは極めて珍しかった。

その時、おばばが不意に口を開く。

「……何年も昔じゃがの、この村にリトル村から一人の若造……  
お前さんぐらいだったかのう……。」

それとお前さんの兄ちゃんぐらいのと3人が来たんじゃよ……。  
その時、そやつらも同じことを言っとった。そう、そして……」

カイトとエイト、3人のハンターも「そして？」と声をそろえて聞き返す。

おばばはその様子を穏やかな表情で見ながら、答えた。

「……出たんじゃよ……鋼龍が……。」

おばばがぐいっとカイトのほうへ顔をよせ、目を大きく見開き静かに口を動かす。

そしてイタズラっぽく健康的な白い歯を見せる。

「は？」

カイトと、エイトと3人のハンターは声をそろえて驚く。

「……と、言っておったよ……。」

鋼龍は目の前の俺たちなんかまったく相手にしないでな……そう言

「つておつたなあ」

おばばはその過去を懐かしむように、薄く笑う。

その時、カイトの手は、冷たい手に突然引かれた。

その手の主 エイトは一本の太刀を担ぎ直し、山頂へと上っていく山道へと脚を進めた。

\*

ベースキャンプには15分程度で着いたかもしれない。

村を出てから、そう時間が立っていないのに、周りにはもみの木が茂  
つり、

枝と葉が覆いかぶさる様にできた空間だった。

エイトは支給用ボックスという青色の箱から、砥石やらホットドリ  
ンクやらを取り出す。

そして頂上付近の雪原に行く、緩やかな細道の前まで行って、  
何かを思い出すように引き返す。

「カイト、行っているのはこの先のまでだからな。間違っても洞窟

に入るんじゃないぞ。」

エイトはカイトの目の前まで顔を寄せる。

「わかつてるやい！ いつまでも子供じゃないぞ……！」

この年頃の子供が言う、典型的な子供の台詞を吐きながらも、

エイトの後姿が狩場へと消えるまで、ずっと見守っていた。

「……さて、行動開始だ」

カイトは支給用ボックスに余ったホットドリンクを2、3個、  
バッグに詰め込み、下り道を駆け下りていく。

両側の切り立った崖が終わると、横に大きな湖を持つ、巨大な草原  
が眼下に広がっている。

左には湖。ここはまだ、雪も薄っすらとしか積もっておらず、  
湖もほとんど凍っていないかった。

右にはカイトほどの背では上ることができそうもない段差がある。  
そこを懸垂で上り終えたエイトの小さな姿が見えた。

それにはまったくと言っていいほど、目もくれず、  
近くをのそのそと歩いている大きな草食のモンスター、ポポへと駆  
け寄るカイト。

そのフカフカとした毛皮を赤くなった小さな手で撫でてみる。

すると、少しながら生き物の温もりが感じられた。

カイトはそれにもすぐに飽きたのか、草原をさらに走り抜ける。少しだけの上り坂の上にはまた大きな平地があった。

左には落ちたらひとたまりもない崖があり、草食のモンスター、ガウシカが跳ね回っている。

だが、今回はカイトの興味はそこにはいかない。

カイトの視線の先にあったものは、右側の、首を垂直に上げてもてっぺんが見ることのできないような巨大な崖だった。

\*

小さな段差を軽々と乗り越えて行くカイト。

「言われたとおり、洞窟には入んないよ」

カイトは自分で自分の言葉に笑う。確かに高い崖だが、小さな段差が、

いくつも重なってできていたのでカイトでも時間が掛かるが、軽々登っていた。

最後の少しだけ高い段差を腕の力で体を乗り上げる。目を開けると深く積もった雪が作り上げる、一面の白い世界を見た。

ずっと先に見えるのは洞窟のもうひとつの入り口、そしてその右にあるのは山頂付近の雪原へと向かう、もうひとつで数少ないルートの一つ……長く延びた、何本ものつるだった。

カイトは深く積もった雪の中を一生懸命に歩き続ける。やっとのことであどりに着いたつるにしがみ付き、腕の力と、足の踏ん張りにすべてを任せ、登り始めた。

\*

何分登り続けたらろう。

さすがに腕にこたえる。頂上はすぐ先に見えているのだが、そのすぐ先に辿り着けない。

「……コレ、手え放していいと思う？ ……いいわけねえだろ、あとちょっとなんだから……」

自分で心に問いかけ、元から頭の中にあつた考えで反論する、カイト時々ある癖だった。  
放しても、下は深く積もつた雪だから、怪我はすることはないだろう。  
そう思いながらも一心不乱に登り続ける。

あと少し、あと少し。途中からは無意識だったかもしれない。  
カイトが自分の目の前のつる以外に視線がいったのは、  
久しぶりのつる以外のものに触れた瞬間だった。  
地面の感触を感じ、少し上に視線が自然といく。

カイトの表情がだんだんに明るくなる。  
そのまま最後の力を振り絞り、体を地表に放り投げた。  
大の字に倒れると、雪の中に少しだけ埋まったのが分かる。

このままになっていると寝そつた。

一瞬、目を閉じ、一気に起き上がる。  
その時はものすごい達成感がカイトの心の9割を占めていた。

#### 4話 『風翔龍に導かれ』

起き上がってみると、あたり一面が白く染まっている。

深く積もった雪は、綺麗に視界の端まで一直線にと続いている。

この光景にカイトも喜び跳ねるのではなく、思わず口をポツカリと開け、見入っている。

そんなことより、山頂を目指しカイトは歩き出した。さっきとは段違いに雪は深い。

底まで埋まると、頭のでっぺんしか見えないといった様子だ。

「……こんなこともあるのかと……」

少しづめき気味に雪を崩さぬように、ゆっくり高く積もった雪の上に寝転ぶ。

そして小さなバッグから丸い、わらで作られた何かを取り出し、マフモフのブーツに括り付ける。

「タツタターン！！ 加工屋のおじさんにまけてもらったのだーっ  
！！」

そして得意げに雪の上を歩き出すカイト。

さっきまでとは違い、カイトの歩いた後は、少しの凹みだけで崩れない。

だが、次の瞬間にカイトは小さく突き出た出っ張りに躓き、うつ伏せに転んだ。

そのとたんに積もった雪がズモッとカイトの形に沈む。

「うっ……」

カイトはうつ伏せのまま呻いた。

\*

「ハア、ハア……。今度はどこに逃げたんだ……」  
エイトの息は荒い。

エイトたちのいる雪原には、大人数で誰かが通ったかのように、足跡が散らばっている。

エイトが取り出した水筒からはチャプチャプと、わずかな水の音が

聞こえてくる。

「ホットドリンクもあと少しか……、うゝ、寒さには勝てないな……」

歯をガチガチと音を鳴らせながら言った独り言は、周りのハンターたちに届いたかどうかは分からない。

不意にハンターの一人が口を開いた。

「まさか、フルフルにここまで追いかけてここをさせられるとはな……」

エイト、さっさと見つけないとやばいんじゃないの？」

エイトは「それは誰でもわかってる」と、言わんばかりにフルフルを探して走り始めた。

\*

カイトは崖の付近の雪原をどんどん進んでいき、開けた場所に出ている。

そこには右と左への分かれ道があった。

右は広い雪原の壁とも言える、ほぼ垂直に伸びた絶壁が両方から迫

る道。

もう一方はしたまで見渡すこともできないほど深い崖と壁の間にある、細道。

雪原のど真ん中カイトは右の道をしみじみと見つめた跡に、左の道へと視線を移す。

「…………どちらにしようかな！！ よし、こっちで決まり！！」  
人差し指を交互に動かし、止まった先には深い谷と右に聳え立った崖を持つ、山頂へのルートがあった。

わずかにできた道へと走り出す。実際にその道を通ってみると、意外と広い。

細くなった部分わずかに終わり、またまた広大な雪原が広がっている。

雪原に出たとたん、にわかに関風が強くなり、横殴りの激しい吹雪となった。

雪は大粒に、絶え間なく身体を刺す。

風は、マフモフを着ていても、寒さを感じさせた。

そしてカイトとその周囲が一瞬だけ薄暗くなる。

それはバサバサという、ゆっくりだが、力強さを感じさせる羽ばたきだった。

ゆっくり、ゆっくりと地上に降り立つ巨大な影。

吹雪の中で見えづらくも、白い巨体ははっきりとカイトの瞳に移っていた。

生き物というにはあまりにはあまりにも恐ろしく、おぞましいそれは、

Monsterモンスター、化け物と呼ばれた……。

そして、その容姿が昔に兄からいつて聞かされた言葉呼び覚ます。大きな翼、2本の足、そして、口からの吐き出されるブレス……

『モンスターの頂点に君臨するのは飛竜っていうんだ』

『例外もいるけどな、飛竜ってのは大体翼があつて2速歩行だ』

『飛竜は口からブレスって言う特殊な攻撃ができるんだ』

カイトの脳裏を過ぎった言葉は、すべてエイトから昔に聞かされた言葉だったのである。

そして、一瞬送れてもう一つ……。

『飛竜を見たら……』

その言葉が無意識に口にし始めるカイト。

飛竜は大きく首を振りかぶりながら、口一点に青白い何かを溜め始める。

『……すぐ逃げる!!』

そう、口ずさんだ瞬間に脚は動いていた。来た道へと走り出す。

それとまったく同時だったかもしれない。飛竜の口からカイトめがけて、青白い光が放たれる。

その瞬間、一瞬光つて見えた飛竜の顔は、言葉で表せないほどグロテスクなものだった。

カイトはもう振り向かない。そして、ひた走る。

稲妻が、カイトのすぐ脇を走る。エイトの言葉は頭の中をこたまし続ける。

『……じゃなきや……』

もう一度だけ振り向くと、飛竜のグロテスクな姿がない。

『死ぬぞ』

その刹那、頭上を何か掠める。カイトが上を見た瞬間、身体は反射的に横へと飛び出している。巨体が落ちてくる。……脚に一瞬かすったそれは、地響きを立てて腹から着地する。雪が吹き飛び、その勢いでカイトも飛ばされた。

「いで！ いでででっ！！」

2回転ぐらいして、頭を抑えながら起き上がり、飛び込んできた方向を見ると、目の前に、あの巨体が青白い光を放ちながらカイトを見つめている。カイトは素早く立ち上がり、後ずさる。

後ろに広げた手がゴツゴツとした岩壁に触れる。カイトは祈るように目をつぶる。

終わった、そう思った瞬間だった。

背中が岩壁に触れると思った刹那、後ろに体重を掛けた身体が崩れ落ちる。

「うわっ……」  
強く尻餅をついて、目を開けると、光ながら電気を身体全体から流す飛竜の姿が、小さな穴の外で見える。

カイトは驚き、周りを見回そうとして首を伸ばす。

上に頭をぶつけて、縮みこみながら上を見ると、低い天井があった。そう……助かったのだ。

偶然、小さな穴が開いていて、斜めにできた穴に、転がり込んでいたのだ。

「……た、助かった……って、やばいやばい!!」  
喜ぶ暇もなく、飛竜の口に青白い光が集まり、洞窟の入り口にその顔が現れる。

ハイハイで奥へと進んでいくと、突如地面が消え、下へと落ちた。正座で着地すると膝がジンジンと呻く。

だが、そんなことも言ってもらえない。ほんの数秒前にいた場所を閃光が通り抜ける。

「あつぶね……。たしかアイツ……フルフルっていったよな……」  
カイトは呟きながら辺りを見回す。

さつき落ちてきた洞窟は、背伸びをしても届きそうはない。

すぐ横には断崖絶壁。落ちたらひとたまりも無い。

次に見たのは右。……そこにはカイトの頭ぐらいの段差があった。

「ふんぬお……だあっ!!」

腕の力だけで身体を持ち上げ、這い上がる。

その先には、上手く手や足を置けるようなイボがでた崖があった。

それにためらい無く近づき、上る。上まではそう、無かった。おそろく30秒掛からなかっただろう。

崖の上には小さなスペースがあり、向かいにはさっき、フルフルに追われた雪原が眼下広がっている。

「うわあ……まだいるよお……」

下を頭をいっばいに伸ばして覗きながらため息を漏らす。

「さてどうするか」と、小さなスペースの中をうろつる歩く。

その次の瞬間、つま先が何か固いものに思い切りぶつかった。

「痛ッ!!! なんじゃこりゃ……」

一瞬、飛び上がったが奇妙なものを見て、それをじっと見つめる。

にわかに風が吹き、謎の硬いものから雪が消える。

それは黒……いや、銀だろうか。

その中間といったほうが分かりやすい色をしていた。それは何かの生き物のように見える。

「岩……じゃないよな？」

小さく呟いたまま見つめていると、何かが紅く、ほんの一瞬光る。それを見逃がさず、頭を近づけた。

色あせた宝石のようなそれを見つめるカイト。

何かの目のように温もりを感じる。それをじっと見つめると、その瞳に何かが映った。

反射的に反対側の上を向く。

もう嫌になるほど見た崖……。それも嫌に高い。

だが、その頂上には氷漬けにされてるものの、何かがあった。その何かがカイトを呼び寄せる。カイトは崖へと近づき、上りだした。

崖は意外と低く、2分ぐらいで上れたぐらいだった。

……だが、その上に崖はない。山頂に到達したのだ。

だが、カイトはそんなことには気づかず、氷の塊に近づき、触れる。

その瞬間、氷に大きな亀裂が入り、音を立てて割れる。

一瞬飛びのくものの、中から出てきたものを見てまた近づく。

「……………これって……………武器……………？」

その武器らしきものは不自然な形をして、地面に刺さっている。

刃の部分から柄の部分に入る境目から、不自然な緩やかな角度に曲がっていた。

ブーメランがもうちょっと一直線に近くなったようだ。

絵の部分は黒く、まるで銃の柄の部分のようであった。

そして一際目立つのが、柄の内側についている引き金。

だが、銃ではない。ちゃんと刃がその謎の武器にはついている。

カイトは無意識にその武器の柄へと手を伸ばす。

そしてそれを握り締め、引っ張る。……………抜けない。

そうになると、今度は両手で力一杯引っ張った。

「うっおりゃっ！…！」

掛け声とともに先がすっぱ抜け尻餅をつく。

「……………てて……………今日二度目……………かよ」

途切れ途切れになったのにはわけがあった。

突然、吹雪が止み、ほんのわずかだが太陽が顔を出す。が、その光がカイトの目に届いたかは分からなかった。その武器を抜いた瞬間、黒い何かがカイトの頭上を通り過ぎた。

それはフルフルの数倍ほどある影。思わず、立ち上がり、その姿を眺める。  
大きく開かれた翼からはついさつき見た、黒光りする謎の岩を思い出させた。

その影が消えないうちに、山頂からさつきの岩を見下ろす。  
それはわずかだが、あの影と同じ色を放っていた。

カイトは飛び去っていく影をいつまでも眺めていた



……ドム……。

首の辺りから冷たい何かが流れ込んだ。痛みは無い。だが、意識が遠のくのが分かった。しかし、それもすぐにカイトの頭からは消えた。

カイトの視界に突如、白い巨体が現れる。

死ぬ

そう思った刹那だった。

『…………引き金を引け!!』

音無き声がかイトの脳裏を過ぎった。

考える暇も無く、いや、その気も無く無意識に引き金を引く。

破裂音、否、爆音があたりに木霊し白い巨体が炎に包まれ、そして落ちる。

すぐ足の先にグロテスクな顔がシューと黒煙を上げながら倒れている。

それは急に頭を上げ、首をちぢ込めた。

『…………横へ転がれ!!』

まただ。またあの声が響く。

だが、それを考える暇も無く身体は動きざるを得なかった。

フルフルの首が縮んだ状態から突如伸び、カイトを食わんと大きく口を開く。

カイトは間一髪に身体を逸らす。

「うおう!? 間一髪う!!!」  
のんきなことを言ってる暇もなく、フルフルの身体が青白く光りだした。

『飛べ!!!』

「もうやってる!!!」

謎の音がするかしないかの刹那にカイトは逆方向へと身体を投げ込んだ。

雪の中に大の字に埋まるが、すぐに立ち上がり距離をとる。

『中々の動きだ。我の前の持ち主を肥えるやも知れぬ……』

その時、また例の音が頭に響いた。

耳から聞こえる音とは別の音。低く、子供の声ではないことは確かな男の声。

「……さつきから誰なの……?」

カイトは一瞬フルフルの存在も忘れ、周りを見回しながら呟く。

その時、謎の武器をもった左手がカタカタと揺れ、静かに上がっていく。

『……我か？ 我ならさつきからお前の近くに居るぞ……』

からかう様にさつきの声が聞こえた。

「……いや、ナイナイ……武器がしゃべるなんて」

『それがあつたのだな……』

カイトの瞳には左手が握り締めるその武器しかなかった。

一瞬の静寂。それを破るようにフルフルが首を擦じらせ口から青白いブレスを吐いた。

それは地面を這うようにものすごいスピードで迫る。

『……どうやらゆっくり放してる暇はないようだ……』

左手が勝手に上がるとそれに引きずられるように足が走り出す。

左手の武器が自分を引っ張り、走ってるようだ。

3方向に枝分かれしたブレスの間を潜り抜け、一気に接近する。

『我ができるのはこのぐらいだ……攻撃は主に任せるぞ』

「えっ！？ ちょっと!!」

戸惑う暇も無く、目の前に白い巨体があった。

その首が一直線にカイトへと伸びてくる。とっさに横に振った武器がその顔面を切り裂いた。血が噴出し、フルフルは後ろにのけぞる。

「……なんだ、この切れ味……」

それはカイトが使っていた、初心者武器のハンターカリングとはまったく違うものだった。

カイトはまだ幼いために、大人しい草食モンスターしか喰れなかったが、そのやわらかい肉質でも斬る時に力を加えても深い傷を作ることはいけなかった。

だが、この武器はなんだろうか……。確かにフルフルはブヨブヨとしている皮に覆われているが、飛竜は飛竜。桁外れに硬いはずが、この武器は斬る、と言うより通り抜ける、と言う具合だったのだ。軽く力を加えたただけなのに恐ろしい切れ味で

切り裂かれたフルフルがもう起き上がることはなかった……。

\*

「くそっ!! あと少しで倒せるって言うのに……」  
エイトたちの苛立ちはピークに達していた。

さつきから何分も経っただろうに、一向にフルフルの気配が感じられない。

あと見てないのは山頂付近の雪原だけだった。  
だが、エイトたちはそこについても無駄足だった。

そこに居たのは斜めに曲がった異様な武器を持つ弟と、  
顔面の裂けた目を覆うような残骸だけだったからである。

「カイト……お前、どうして此処に……」

カイトがその声に過敏に振り向く。

そしてその大きな目がいつも以上に見開かれる。

「……げっ」

逃げようとするカイトの腕をエイトが掴んで引き寄せた。

「もしかして、お前がフルフルを……」

赤く染まる雪原に横たわるフルフルから弟に目を移らせる。

カイトはゆっくりと頷いた。

「……まあ……結果オーライだな……」

5人の笑い声が静かな雪原に響き渡った。

## 6話『朝日とともに』

ポケット村に戻ると、すでに夜更けと言う感じだった。

雪山では空が雲で覆われていたため、時間が分からなかったのだ。

村の入り口のすぐ脇にある小さな家。その一軒の古びたドアを開ける。

それはガタツと一瞬止まったものの、軽い力で動く代物だった。

中には小さな部屋が二つと、部屋より広い矢も知れぬキッチンが1部屋と言う構造だった。

カイトは迷わず、二つのうちの一つの部屋に駆け込みベッドに倒れこむ。

謎の武器は隣にあったダンスに立てかけてある。

もう10分は足つただろうか。

カイトは動く気にも、布団に潜る気にも、ましてや仰向けに寝る気も出ないまま、倒れている。

「……………あのさア……………お前って何なの？」

限りなくシンプルな質問に、男の声がカイトの頭の中だけに響く。

『我か？ 我は”ガンブレイド”と呼ばれている。名は狐斬。』

「へえ、カツコイイ名前。」

その言葉が言い終わらないうちにカイトのまぶたが重くなる。だんだんと虚ろになる視界には、薄汚れた白い天井だけが写っていた。

\*

「イト……カイト……」

頭の中に、何かの音が聞こえてくる。

頬を伝う風は冷たく気持ちいい。

「……カイトっ……」

突如、雷がとどろいたかと思うほどの怒鳴り声とともに、朝日が顔

を照らす。  
思わず閉じていた目をさらにきつく瞑る。

その次に、脚を丸めて入っていた、掛け布団が勢いよく引き剥がされた。  
とたんに寒気が背筋を襲う。

カイトはたまらず目を見開き飛び起きた。

「ううおいッ！！ もうちよつとぐらいいいだ……る……」  
時計を見るとすでに9時半を回っている。

目の前にある、兄の顔が少し厳しい表情でカイトの顔を見つめていた。

「何が、もうちよつとだ。それより話がある……」

エイトは腰をゆっくりとあげ、小さなドアをかがみながら通り抜けた。

カイトも手早く着替えてそのあとを走り、追う。

外に出ると、空は快晴、積もった雪はわずかに溶け、村の人々が通ったあとで細々な道ができている。

エイトのあとを、その道をたどるようにながらついていく。  
右側には昨日はなしたおぼばがいる。

「おはようさん」

少しなまり、聞き取りにくいのが確かな温かみを感じられる。

エイトはそれに軽く会釈する。カイトも右手を軽くあげ、エイトのあとを追った。

不意に正面を見ると、木造の大きな建物が建っている。エイトはそこの中に入っていった。カイトもその後を追う。ボロボロの布が掛けである入り口を抜けると木のおいと酒の香りが混じった

においがぷうんと鼻を突く。

大きなテーブルが何脚もあり、カウンターの前には3人の受付嬢が並んでいる。

そして、大きなボードは、雰囲気こそ違うが、リトル村にもある酒場を思わせた。

「あら、また来たの？ 何か食べてく？ それとももう狩り？」

エイトがカウンターの前に立つと、ピンク色の服に白いエプロンの受付嬢の一人が話しかけてきた。

「いや、弟の朝飯だ。パンと雪山草のサラダを頼む」

「ハイハイ、ちょっと待ってね」

そういうと、受付嬢は急ぎ足で奥の部屋へと入っていく。かすかにする香りからして厨房だろうか。

1分も経たないうちに受付嬢が、トレイを持って戻ってきた。

それをエイトが受け取り、近くのテーブルに座る。

そしてカイトにそつと手招きした。カイトは小走りでその正面のテーブルに座る。

その次の瞬間、エイトの後方から酒場全体に響くような大声が聞こえた。

「エイトー!!! 遅かったじゃないかあ!!! もう話したのかあ?」

その大きさを物語るかのように酒場にいたほかのハンター、村人、

朝酒していたハンターが一齐にこつちを振り向く。

だが、その人たちは、声の主を確かめると当たり前のようにもとの場所へと視線を戻す。

大声の主はドシドシと音を立てながら歩いてくる。

中年のおじさんだが、全身に赤い防具を身にまとっていた。

そして、その謎の人物はエイトの隣に座る。

「これからです。……なア、カイト……お前ももういい年だからな  
……」

しかも弱つてるとはいえ、一人でフルフルを倒した……」

真面目な話なんだと、カイトも自然と背筋が伸びる。  
豊かな表情をしているのは謎のオヤジだけとなった。

「お前……ハンターになりたいんだろ？ それなら許してやる」  
その言葉はカイトの頭の奥へと響き届く。

8年間、我慢し続けずと待ち望んでいた言葉がカイトを動かせる。

身乗り出し、口を開くカイト。だが、手を大きく広げエイトがそれを制す。

「た・だ・し！！ リトル村付近のモンスターを狩るのはもっと経験を積んでからだ。」

それまで一人でここに残り、こちらの教官からハンターとしての知識を学ぶんだ」

カイトは隣のオヤジへと視線を移す。

腕を組み明らかにえらそうな態度をとっているが、なぜかとてもい

い人に見える。

「兄ちゃんは？」

カイトは無表情に問いかける。エイトは少し下を向いてからカイトの瞳を真っ直ぐと見つめる。

「俺はリトル村に帰る。さっき連絡があって、ちょっと強力なモンスターが出たらしい……」

エイトの表情がわずかに曇った。だが、カイトは目の色を変えずに、唇の端だけを少しあげた。

「じゃあ俺、残るよ。んでもってすぐに最強ハンターになって驚かしてやるよ……」

微笑んだカイトにエイトも表情を緩める。

「じゃあ、お前も正式なハンターだ。俺はもう行くが、がんばれよ。」

……教官、コイツの手続きもお願いできますか？」

教官と呼ばれたオヤジは軽くうなづく。

「うむ、お前はゆっくりと里帰りしてくるがいい」「  
笑いかける教官にエイトはわずかに苦笑する。」

「……里帰りって……遊びじゃないんですよ？」

エイトはそっぴいなながら立ち上がった。ゆっくりとした足取りで酒場を出て行く。

カイトはそれに大振りで手を振る。

エイトはわずかに手をあげ、カイトの視界から消えていった。

## 7話 『狩るか狩られるか』

カイトは酒場の隣にある、小さな木のゲートの前に立っていた。その小さな左手には弧斬が収まっている。

すっかり太陽も昇り、暖かい日差しがカイトの黒い頭を照らしている。

その後ろから豪快な声が聞こえてくる。

振り向いたカイトの方へ、真っ白い歯を見せながら近づいてくる教官の姿があった。

「いやあ、スマンスマン。遅れた。準備に手間取ってなあ!!」  
限りなく能天気な笑顔と大声が軽くうつとおしいのだが、  
恨めないその人物はカイトにハンターの基本をたたえこむべく、準備をしていたのである。

カイトは軽く苦笑しながら弧斬を肩にかける。

「……で、俺は何をすればいいの?」

カイトは表情を変えずに教官に問う。すると教官はゲートの奥の建物指差す。

「お前にはこれから肉食竜を狩ってもらう。」

建物に入り、右の出口から道なりに進んでいくと雪山に似せたフィールドがある。

そこにいるモンスターすべてを狩ってもらおう」

さつきまで、やかましい声で話していた教官でも、周りの迷惑を考えたのかポリユームを落とす。

カイトには肉食竜と呼ばれているモンスターには聞き覚えがあった。ランポスだ。そして雪山に適用するようにランポスが変化した固体、ギアノスの名前が頭をよぎる。

ギアノスカ……いける！

「任せな。そんな下級モンスターすぐに終わらせてくるぜ」

カイトは口の端を緩める。が、教官は太い眉を吊り上げ、眼を鋭くする。

そしてカイトとすれ違うように、肩に手を置きながら歩いていく。

「狩りは遊びじゃないぞ。殺るか殺られるかだ。そして今回はとっておきを用意しておいたぞ」

教官は険しい表情のまま、建物の奥へと消えていく。最後に口の端を小さく吊り上げた。

「おゝ、怖っ……まあ行くか……」

ゆっくりと建物へと入っていく。左側には雑な字で『大闘技場』と書いてあり、

ダサイ装飾の施された看板が張られている。

それをしみじみと見てから右側の出口から外に出る。

その瞬間に、ひんやりとした風が頬を掠めた。

3分ほど歩いていくと、黄色いテントが見えてきた。ベースキャンブについたのだ。

木々の間から見えるのは、雪山にははるかに及ばないが、小さな山だった。

青い木箱を開ける。中からビンに入った応急薬、それから乾燥させてある携帯食料、

性能は悪いものの、小さく持ち運びやすい携帯砥石。

それらを小さなポーチに詰め込み、雪山へと足を運ぶ。

森林を抜けると、開けた雪原を連想させる広場がある。

そこには雪山の肉食竜、ギアノスたちが5匹、うろついている。中級ハンターにもなれば5匹など相手にならないが、新米ハンターには結構な敵である。カイトは遠くから改めてみると意外と大きい。

だが、恐怖はない。むしろカイトには難易度の高いゲームに思えた。『怖気づいたか？』

今まで一言もしゃべらなかつた弧斬の音が響く。それはカイトをか  
らかっているように思える。

「うっん……その逆っ」

その言葉とともに飛び出す。弧斬の小さな笑い声が聞こえる。  
ギアノスの一匹がこちらに気づき、不気味に咆える。

それにつられるように残りの四匹もこちらへ身構える。  
そのうちの1匹が走り出し、姿勢を低くする。そして跳んだ。

強靱な足が地面を蹴る。その跳躍力で、かなり離れていたが一気に  
距離を詰められる。

それにあわせるようにカイトは引き金を引く。

カイトの直感がそうさせたのだ。

轟音とともに、ギアノスが炎に包まれた。

黒く煙を上げ、倒れたがすぐに立ち直り、こちらに身構える。

カイトは小さく舌打ちする。

『もつと引き寄せろっ！』

弧斬のアドバイスはカイト本人が一番よくわかっている。

「んなことわかってるよっ！！」

その声に向かつて怒鳴る。さっきの一匹に向かつて走る。

そして高く差し上げた刃をギアノスの脳天に向けて振り下ろす。

だが、その刃がギアノスを直撃する寸前にギアノスは後ろに跳び、かわした。

「くそっ！」

カイトは軽く唇を噛む。だが、再び一匹に狙いを定め、駆け出した。

二撃目は砲撃。今度はぎりぎりまで詰め、引き金を引く。

バックステップでよけるだろうと、先読みをしてざ斬撃のフォームから急に銃口を

ギアノスに向けたのだが、予想外に、ギアノスは真上へ高く跳ぶ。

……見切られている……

そう思った瞬間、弧斬のカイトを呼ぶ声に我に返った。

飛び上がったギアノスはその鋭い爪を煌かせ、のしかかってきたのだ。

それを間一髪、弧斬の腹で受け止める。カイトは後ろへ倒れた。

だが、腕だけは踏ん張り、ギアノスの足を押さえ続ける。爪と剣の擦れあふ嫌な音がカイトの耳を貫く。

その腕はカタカタと震えている。

………何で避けられる………？

こんな危機的な状況でも、今のことより次の一手のことがカイトの思考を占めていた。

……弧斬は知っていた。どうすればいいか……何が答えなのかを……。  
だが、言わなかった。行ったところでそれをできるかと言ったらでき  
ないから……。  
カイト自身がそれを気づき、身体が直感するのを弧斬は待っていた。

## 8話 『肉食竜たちの狩り』

「くっ！！」

腕がピクピクと震える。その腕で支える弧斬が鼻先に触れた。

ギアノスはカイトとあまり変わらぬ背からは想像できないほどの力でのしかかってくる。

鋭い爪はカイトの瞳のすぐ前で、不気味に光る。

これが、下級モンスター……！！

カイトの頬を汗が伝う。さっきまでとは打って変わり、焦りの色がカイトの顔の7割を占めていた。

突然聞こえたギアノスたちの鳴き声に回りに目が行く。ギアアアと、甲高くも不気味なその鳴き声の直後、

周りのうちの数匹がこちらに走ってくる。

とっさに抑えていた弧斬を引き抜き横に転がる。

勢いあまったギアノスたちは、仲間同士でぶつかると、すぐに立ち直りこちらを威嚇した。

カイトもすばやく立ち上がり、ギアノスをにらめつける。  
一瞬、両者が硬直した。

次の瞬間、カイトが走り出す。振り上げた弧斬が黒く、いや、銀に輝いた。

そしてギアノスの前でいつきに加速し、その勢いそのまま振り下ろす。だが、ギアノスはいとも簡単にそれをかわした。

後ろに無駄のない動きで跳ぶギアノス。

その凶暴な顔はカイトをあざ笑ってるかのように見えた。だが、カイトはにやりと笑う。

「……………そうくると思ってたよー!!」

間髪いれずに、弧斬の銃口をギアノスに向ける。

ここまででは予想をしていなかったのか、着地するかしないかのギアノスに次の動きへのモーションはまったく感じられない。

さっきの砲撃で弱ってるはずだ。

ギアノスは初心者には確かに脅威だ。

だが、下級は下級。体力はそこまでのモンスターだった。しかし、ここで再びカイトの快進撃は終わる。引き金を引くか引かないかの刹那

「うっ……」

意識が遠のく。後ろから何かが当たったのだ。重量を感じさせる「ゴスツ」と言う音は、ギアノスが空中から追突した音だった。

前のめりになるも、弧斬で身体を支える。

『カイトっ!!』

弧斬が叫ぶも、それはカイトに届いているかはわからない。その瞬間、真上からギアノスの鳴き声が聞こえた。意識が朦朧とする中、直感だけがカイトを動かした。

ギアノスがカイトを捕らえる

そう見えた。だが、すでにカイトの姿はない。

ギアノスの見た先には、自分の片足が落ちている。弱弱しく、ひと鳴きし、ギアノスは倒れた。

「……そうか……わかったぞ〜!!」  
その後方でカイトが叫ぶ。周りに敵がいるのも忘れ、無邪気な笑顔を見せる。

そして、残ったギアノスの一匹をキツと睨み、走り出した。

ギアノスは返り討ちにせんと、鋭い牙をむき出しにしてカイトを迎え撃つ。ギアノスの口が大きく開かれた瞬間、カイトはふつと身体をそらした。

「流れに任せて……」

そしてすれ違うようにしてギアノスの頭へと剣を煌かせる。

「……そつと手を添えるっ!!」

弧斬が流れるように動き、ギアノスを一閃した。

ギアノスは断末魔をあげることもなく、地面には二つの影が落ちる。それが積もった雪を赤く染める。

返り血一つ浴びていないカイトはゆっくりと立ち上がり、残ったギアノスを睨む。

そして、そのうちの二匹目がけて走り出した。

カイトの表情はさっきまでの遊び半分でも迷いに迷った顔でもない。

ただまっすぐに獲物を見つめる狩人の顔だった。この瞬間にギアノスとの狩人と獲物の立場が逆転する。だが、カイトの狙うギアノスはさっきの2匹とは違った。かなり距離が縮まっても反撃に出たり、避けようとしな

まるで、さっきの自分をコピーされたように……。

一瞬、迷いが生じる。

だが、その瞬間、ある衝動がカイトの中を走り、それも消えた。

カイトは突然、銃口を後ろに向け、引き金を引く。

爆音とともに、カイトは転びそうになるほど加速した。

ギアノスは突然距離を詰められ動けない。その至近距離から、引き金を引く。

ギアノスは炎に包まれた。

今の弧斬の使い方は、突然カイトの記憶に入り込んできた。いや、元からあった記憶が蘇ったのかもしれない。

息をつくまもなく身構えるが、ギアノスはじりじりと後ろへ退いていく。

逃がすか！！ っと一気に走り寄るが、その脚が止まった。

「ギヤアツ！！ ギヤアアア！！」

カイトの表情が強張った。

ギアノスではない。さらにドスの効き、低く不気味な鳴き声は、低いがけの上から聞こえてきた。

その鳴き声の主はギアノスより一回り大きな身体を持ち、より鋭い牙と爪。強靭な脚を持っている。水色のトサカがボスの威厳を示している。

ドスギアノス……

雪山の肉食モンスター、ギアノスのボスが、獲物を捕らえるような目で  
こちらを睨めつけていた。

## 9話『勝利と師匠』

ドスギアノスがカイト目掛けて飛び降りる。  
両手両足、全てがカイト目掛けて繰り出された。

脚の一際大きく鋭い爪は、喰らったらマフモフなどではひとたまりも無いだろう。

カイトはそれを余裕を持ってかわすと、すぐに銃口をドスギアノスに向ける。  
その瞬間だった。

「ギヤア！ ギヤアツッ！！」

その後ろから発せられた甲高い鳴き声に引き金を引きかけていた人差し指が止まる。

とっさに後ろに向かって弧斬を振りぬいた。

後ろから飛び掛ってきたギアノスの身体が宙を舞う。

ドサツと落ちたそれは、雪を真っ赤に染めた。

弧斬は赤く染まることなく、白銀の輝きを絶やさない。

カイトはギアノスの亡き骸を見てから、

どこから湧いたのか、2倍にも3倍にも膨れ上がったギアノスたちを見た。

『気をつけるカイト!!』

弧斬が叫ぶ。

「ボスを守るうってわけか……」

冷静だったカイトにわずかだがあせりの色が見える。

その時、ギアノスのうちの一匹がカイト目掛けて飛び出した。繰り出される爪をしゃがんでかわすと、立ち上がるモーシヨンのま、ま、ま、アッパーをするように斬り捨てる。

だが、間髪いれずにもう一匹が飛び込んできた。それを横に避け、銃口を向ける。そこに今度はそのギアノスの後方から、一匹がジャンプし、

カイトの後ろからは一匹が爪を煌かせながら走ってくる。カイトはとっさに横に飛ぶ。

頭のすぐ上をギアノスの爪が掠めた。頬を冷や汗が伝う。

カイトはほんの数秒前まで自分のいたところを振り向いた。  
ギアノスの鋭い爪が雪を削り、岩肌が露になっている。

「……おいおい、コレやべ」

血が弾けとんだ。

その瞬間だけが遅くなるような感覚は、映画でも見たことがある。  
それを今、リアルで感じている。

『カイトっ!!』

次の瞬間、その声と突然襲ってくる痛みで世界が戻る。  
弧斬を握る左手がわずかに緩む。 力が入らない……  
左肩のマフモフが破れ、その断面は赤黒くなっていた。  
後ろには牙から紅の血を垂らすドスギアノスがいた。

ドスギアノスは動かないカイトから警戒を解いたのだろうか、  
止めを刺すべく、ゆっくりとした足取りで近づいてくる。

ドスギアノスの爪が雪で反射した日光を浴びて一際不気味に光った。その刹那、カイトは弧斬に無理に力を込め、ドスギアノスの身体を一閃した。

ドスギアノスは2、3歩、よろよろと後ずさった後、静かに倒れた。最後に弱弱しく一鳴きし、動かなくなった。

周りのギアノスたちは、ボスがやられて自分たちもやられると思ったのか、すすすこと引き上げていった。

「大丈夫か？ カイト……」  
弧斬が心配そうに聞く。

カイトは仰向けに雪に倒れてから口を開いた。

「……………これが大丈夫そうに見えるほうが大丈夫じゃないよ……………」  
薄く笑うカイトに、顔は見えずとも弧斬が笑いかける。

「そんな冗談が言えるなら大丈夫だな」  
「……………いや、これマジでやばいだろ……………」

「いやあ、いやあ、ギアノスの群れが合流するなんて予想外だったな〜」

訓練所の一室で、教官は豪快に笑う。

昼間からジョッキを片手に訓練をしにきたらしきハンターたちも騒いでいる。

「予想外って……マジで死に掛けたんだからな!？」

カイトは本気で激怒するものの、その怒りも騒いでるハンターたちの能天気さで、すぐに消沈した。

「スマンスマン。まあ、ワカチコ、ワカチコ〜ってことで」

カイトはぶつくさいいながら、包帯ぐるぐる巻きの左肩をさすっている。

だが、カイトの頭の中は、大きな達成感がほとんどを占めていた。

「そつえば、その武器なんていうんだ？ どっかで見たことがあるんだが……」

教官はがんばって思い出そうとしているみたいだが、その割には、ビールを口に運ぶ手を止めない。

「こいつ？ こいつは弧斬って言うんだ。ガンブレイドって種類らしいんだ」

カイトは自慢げに弧斬差し上げる。

「……弧斬……ガンブレイドねえ……」

教官は意味ありげにうなづく。

そして次の瞬間、何か重大なことを思い出したかのようにバンと思い切り、テールをたたき、身を乗り出した。そしてカイトの目をしじみと見る。

「そういえば、カイト。お前にはハンターとしての基礎能力は身についているようだ。」

その証拠にあの数のギアノスを倒した。だから、私の教えることはなくなってしまったわけだ」

カイトは無表情に頷く。

あたりまえだともいわんばかりの表情に教官が、少しイラつときたのが目に見えた。

だが、教官はそのイライラを飲み込むと話を続ける。

「で、だ……。お前にはこれから一人前のハンターとして過  
してもらおう。」

だが、それには危険がつき物。でも私はここを離れられない。  
そこでお前に師匠をつけてやろう」

師匠という言葉に妙に反応して、目を輝かせるカイト。

だが、教官に手招きされて出てきた青年を見て、そのイメージは一  
気に崩れ去った。

見た目はカッコイイわけだが、酔って顔を赤くし、

フラフラと近づいてくるその姿は、若いのに

面接で落ちてグレた一般人にしか見えなかったからである。

嫌な顔をしたカイトを教官がいさめる。

「……………まあ、今は酔っているが、こいつはハヤテと言って、  
普段はクール&amp;ビューティーな凄腕ハンターだ！」

“&amp;”を妙に強調し、「エーン」と自信満々で褒めたが、  
真っ赤な顔の教官からは何の説得力もなかったのである。

こうしてカイトの弟子としての波乱の生活が始まった。

## 10話『いざ、狩りへ』

「おゝきろ〜」

カイトのいい加減になってきた腕の動きが、ハヤテの頭の中に入り込んでいった。

突然、起き上がったハヤテに一瞬後ずさるが、またハヤテを睨み付ける。

その眠そうな目が一瞬合う。が、ハヤテは目を擦ると、

「お休み……」と消え入りそうな呟き、また寝転ぶ。

ボサボサの黒髪。細い眉毛に小さい口。

いかにも女性がすぐに喰いつきそうな顔だった。

だが、恋が実った経験があるほどの男らしさもない。

鋭い目が開かれた。そして大きな欠伸。

ハヤテはワントンポ遅れて時計に眼をやる。すでに9時を回ったところだった。

ハヤテの手がカタカタと震える。

「……なんで起こさなかった……今日は狩りに行くっていったろ……」

脱力したような眼でこちらを睨むが、恐ろしさどころか卑屈感を感じられるような瞳だった。

「何度も起こそうとしたんだけど……あ、俺は飯済ませたから」  
啞然とするハヤテを呆れ顔で見つめ返す姿は  
年齢が逆転したように見える。

突然大声で叫びながら飛び起きたハヤテはパン一枚をくわえ、

おくの部屋へと消えていった。

カイトはハヤテが巻き起こしてついたホコリをマフモフから落とす、  
弧斬に手をかける。そのとき、ドアが勢いよく開き、

ハヤテが息を切らしながらでてきた。

ボサボサだった黒髪も、気づけばサラサラになっていたいる。

目もさつきとは違い、大きく見える。

だいぶ印象が替わったように見える。

だが、こちらが本物のハヤテなんであろう。

防具はエイトのものとよく似ていた。

兄はたしか、レウスという防具を使っていたはず。

ただ、ハヤテの装備は蒼い。空よりも濃く、海よりも深い色合いだった。

後から聞いたのだが、これはリオソウルという防具だそうだ。

リオレウス亜種、通称リオソウルというモンスターの素材を使った  
一流ハンターでも中々作ることには叶わない代物らしい。

そんな印象はこれっぽっちも浮かばないのだが……。とりあえず、狩りに行くらしい。

ハヤテはちゃんと武器を携えている。

二本の剣、双剣だ。十字の黒い柄から伸びた刃は青白く、鋭くまっすぐに伸びている。

「カイト……今日の俺の武器はホーリーセーバー。水属性だ……」  
ハヤテは二本の剣をはじめて見せたまじめな顔でカイトに見せつける。

カイトはよく意味もわからずうなづく。

「うん……で？」

ハヤテは少し不機嫌そうに頭を描く。

「もしかして、属性武器って初めてか？」

小さい子供に話しかけるように中腰になるハヤテ。カイトはまるで話がわからないのか首をかしげる。

「属性って……何？」

カイトは少し小さい声で問う。

ハヤテはため息を漏らしながら、カイトの座るベッドに自分も座る。

「この前、お前の兄貴とフルフルを狩りに行ったんだがな……あれも属性武器だ……」

カイトの頭はすでに混線状態に陥っている。

だが、そんなことはかまわないかのようにハヤテは話を進める。

「飛竜刀【紅葉】……火竜の素材で作った火属性の武器だ。  
対象物を切った瞬間に刃から火がでる……」

飛竜刀【紅葉】……カイトが何度も聞いたことのある言葉である。  
兄がこれを作って村に戻ってきたときは、  
村人たちは飛んで跳ねての大騒ぎだった。  
そしてもうひとつ何度も聞いたことがある。

火竜……

その姿を見たらすぐに逃げると  
ここから西に進むとあるシュレイド地方……。

この地でハンターが誕生したのには一つの大きな理由があった。  
そう。この火竜の存在があまりに強大すぎたが故である。  
そしてその火竜がなぜそこまで恐れられたか……。

それは生物が最も恐れるもの　火を操れるからであった。  
それ故に火竜を素材とする飛竜刀【紅葉】は火を発するのである。  
だが、そんなことをカイトが知る由もないのであるが。

「……まあ、分かってくれなくても結構だ」  
冷やかに見つめてくるハヤテに少々いらっときたカイトだったが、  
何も言い返せないのもその場は引き下がる。

「でさア……結局、何狩り行くんだよ」

最もな指摘だった。

カイトは早く行ききたそうに、弧斬の引き金に指を差込み、  
クルクルと回す。

「狩りに行く前に刃物の扱いを習ったほうがいいんじゃないか？」  
苦笑するその顔が、さっきよりも余計に憎たらしく見えたのは気の  
せいではなかった。

もつとも、もうそのギザつたらしいその態度にも慣れ始めていたの  
だが。

反論しようとするカイトが口を開く前に、ハヤテが話を進める。

「まあ、冗談はここまでにして……今回はイヤンクックを倒しに行

く

「はっ？ クック？」

なめてんのか、とも言いたげな表情に、ハヤテは必殺のデコペンで答える。

冷静な表情から放たれたその一撃は、  
ちよつど爪の頭をカイトの額に直撃させる。カイトは低く唸りながらうずまり込む。  
軽く涙目になりながらもハヤテの方に向き直った。

「おまつ！ クックなめんなよ！！ 言ってみればドスギアノス×  
5ぐらいの強さだぞ！！」

ハヤテ本人は説教じみた話し方をしてるようなのだが、  
それには何の説得力もこもっていない。

その証拠にカイトはそこまで真剣に耳を貸さなかった。

「じゃあ、余裕だな」

『……………ププッ』

弧斬が一瞬笑ったように聞こえたのは空耳であろうか。

「……じゃあ、お前が本当にピンチになるまで手は出さないからな！？」  
目を吊り上げ、13の少年に本気で反論している姿はカイトの年齢となんら変わらなく見える。

だが、それに対してのカイトの怒りようはさらに凄まじく、小学生にしか見えなかったハヤテだが、さすがにそれ以上いわないのが二十歳のプライドだったのかもしれない。

「じゃあ、カイト。村の出口で待ってるから準備ができたらいよいよハヤテは出かけていた頭を再び戻し念を押す。  
「まかせろっ！！」と元気で答えるカイトは少し考えてからベッドに座る。

「……別に準備するモンなんてないな」  
真顔でいったそれに、久々に弧斬が口を開く。  
『いいのか？ カイト。ドスギアノスにあれだけ苦戦してたのにな』

弧斬は馬鹿にしているのだろうか？  
一瞬そう思ったのだが、これから一緒に行くパートナーだ。  
アメリカカンジョークで通るだろう。

そんなポジティブな考えも、数時間後にはできなくなるとは夢にも思っていなかった。

## 11話『襲撃』

すでに日は沈みかけている。

休み休みではあるが、それでも確実に進んでいると感じられる。その証拠に、さっきまで嫌というほど見た雪が一片も見えない。

あたりは木が生い茂り、いかにもこれから行く狩場……  
密林というに相応しい風景に変わっていた。

なぜ密林を目指しているかという点、それは8時間も前にさかのぼる。

今回、カイトとハヤテは初心者ハンターの登竜門……  
そして始めての大型モンスターを倒すべく、テロス密林を目指して  
るのであった。

そして歩き続けるとこと8時間。

水筒を振るとわずかに水の音がする。

思い切り上を向き、その水筒を乱暴に振るが、水滴がポタポタと垂れるだけだ。

「おまつ！？ まだ狩場についてもないんだぞー！！」

呆れ顔でカイトを見下ろす。いい加減、この態度にも慣れてきた。たばたばといかにも入っているという感じの音がハヤテのポーチの中から漏れる。

それを物欲しげな顔で見つめる視線に気づいたハヤテは  
ポーチを頭の上に持ち上げて歩くのだった。

何分がたつたのだろう。

あたりはすっかり暗くなっているが、さっきから10分もたっていないように思える。

延々と脇に同じような木が生えている。

そこをブルファンゴの群れでも通り抜けたかのような道……。いい加減、狩場についてもいいんじゃないだろうか。そう思っていた時、急に止まったハヤテの背中に鼻をぶつけた。

赤くなった鼻を押さえて埋まりこむ。

だが、すぐに立ち上がるとハヤテに食いかかった。

「……いや、あんま俺悪くないだろ。……ってそうじゃなくって今日はここにとまるぞ」

ハヤテはそう言うのと静かに木に寄りかかった。

「……ココって……野宿？」

それに眼をつぶったまま頷くハヤテ。

カイトは小さく何度も頷きながら座り込む。

そして近くの木にひざ歩きで近寄る。寄りかかってみると意外とフイットする。

自分の隣に弧斬を立てかけ、眼をつぶる。

そうしていると、すぐに寝てしまいそうだ。

もう少しはしゃいでいたかったが、少しずつ意識が遠のいていく。気がつくのと、小さな寝息を立てていた。

\*

小枝が折れる。そしてその反対側からは草を踏む音。1つ、2つ、あるいはもっと……。大人ぐらいの背丈の影が数個、足音を潜め一步一步と近づいてくる。

その足音が足の裏から地面を伝い、カイトの中へと響く。

「……………んだよあ……………」  
寝ぼけ眼のカイトは眼を擦りわずかに眼を開く。それが次の瞬間、最大まで開かれた。

目の前にあったのは月明かりに照らされた不気味な顔。鋭い牙が眼の先にあった。

「……………えつと……………こんばんわ〜」  
それは鋭い爪で襲い掛かってきた。カイトは脇にある、弧斬を乱暴に掴み、横に転がる。

さっきまで自分の寝ていた木に、痛々しい傷跡が残る。  
ランポスだ。雪山のギアノスと姿かたちは似ているが、色は濃い、鮮やかな青をしている。

『カイト！！ こいつはギアノスとそこまで変わらんぞー！』  
弧斬も目を覚まし、少しあくびが混じりながらも声を張り上げる。  
「それは見りゃわかるってっ！」

さっきのランポスが自分に向けて走り出したところを斬る。それは首筋に当たり、その場で倒れた。

額の汗を拭う。だが、安堵は訪れない。

辺りを見回すと、5匹のランポスが星を描くような位置取りでだんだんと距離を詰めてくる。

カイトは少しずつ後ずさるが、それを阻むかのように木が背中に触れた。

その根元にはいびきをかきながら爆睡するハヤテがいた。

「おいっ、ハヤテ！ 起きろー！！」

弧斬を両手で構えたまま、目だけをハヤテに向ける。

……返事はない。完全に寝入っている。

「……………あゝ、もうっ！！」

次の瞬間、地面を蹴り飛び出す。

正面の一匹に向かって、刃を突き出した。

その突きは易々と交わされる。だが、間髪入れずに引き金を引いた。

轟音とともに、灼熱がランポスを包む。

それが夜の空を焦がした。響くのは甲高い悲鳴。

その瞬間に周りのランポスたちの目の色が変わる。

さっきまでのおちよくりのような表情は、微塵も残っていない。

全力で獲物を捕らえる、狩人の顔だった。

「ギャアツ、ギャアア!!!」

次の瞬間、後ろの一匹が勢いよく飛び出す。

両手両足の鋭い爪が一気に襲い掛かってきた。

それにとっさに反応し、銃口を向け、人差し指に力を込める

その刹那、後ろから不気味な鳴き声が襲い掛かってきた。

砲撃を放つ前に、それをかわす。

これが、ランポスのコンビネーションだった。

知能の発達した彼らは、単独では弱いものの、

モンスターとしては珍しく、集団で狩りをする。

けて強い相手ではないが、それが厄介なところだった。

ましては新米ハンターのカイトには、その強さが一匹の5倍にも10倍にも思える。

ランポスたちはまた、少しずつ近づいてくる。

内の一匹が、舌なめずりをし、駆け出した。

それに続き、回りもいっせいに飛び出す。

やられる!!!

防ぐすべもない、全方位からの攻撃。

ランポスたちが目の前に迫る瞬間に、きつく眼を瞑った。

……次の瞬間、何かが勢いよく飛び散る。

数秒たつても何も起きない。

恐る恐る目を開く。

目の前にはあつたものは、飛び散る赤……。

それと、二つの刃を握り締めたハヤテの背中があつた。

それはさっきまでのイメージとは縁もなく、一流のハンター。

あまりに大きな背中だつた。

身にまとつたりオソウル装備が、その風格をいつそう強くさせる。だが、その顔は次の瞬間にはさっきまでの穏やかさが戻っていた。

「いや、まさか寝てる間に襲われるとはな」

もしかしたら、寝ている間にやられていたかもしれないのに、そんなことを抜けぬけと口にする。

それが、逆に親しみやすいところでもあるのだが……。

カイトはそつと胸を撫で下ろしていた。

ハヤテが起きなかつたらどうなっていたか……。

もちろんランポスたちのブレックファーストになっていただろう。想像しただけでも寒気がした。

森には静けさが戻つた。そう思つた瞬間である。

小鳥のさえずりが、森を震わした。

道の彼方から光が差し込む。辺りを照らし、暗い夜が終わりを告げる。

カイトはその道を光の方へと走り出す。

そして立ち止まつた。長かつた一本道にも終わりが来た。

森が開け、高い丘の上に出る。

眼下に広がる、広大な密林の彼方から太陽が頭を出している。

その光景が大自然そのものに見えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5779g/>

---

Hunter's Life

2010年10月8日12時49分発行